

カンギレムの「規範=平均」説の再検討

—統計知の歴史社会学的意義を巡って—

無所属（前・東京大学大学院） 生間元基

1 目的

この報告の目的は、統計の知識史・社会史における「規範=平均」説の再検討である。ここで「規範(norme)=平均」説とは、既存諸研究に緩やかに共有されている次の知見を指す。すなわち、正常／異常(normal/anormal)という新しいタイプの判断が、統計的な平均概念の使用に伴って、概ね十九世紀に出現したとする歴史的知見である。この知見は、例えば福祉国家の成立や優生実践の展開を論ずる文脈で社会学にも導入されているが、十分に整理された仕方で社会学者の利用に供されているわけではない。そこで本報告では、この知見の射程を明確に論定することによって、十九世紀の統計知が有していた歴史社会学的な意義について今後探究されるべき課題を示唆したい。

2 方法

「規範=平均」説の端緒である Canguilhem (1966)を対象として、その所説を検討する。M. Foucault, F. Ewald, I. Hacking 等の後続研究は、同書に大きく依拠するからである。これらの後続研究は、(a) カンギレムが生理学史の精査から引き出した知見と、(b)より広汎な社会的趨勢に関する彼の見解とを、判然と区別していない。そのために、(a)の知見から果たして(b)の社会診断を導けるのか、あるいは(a)の知見から他のいかなる社会診断を導けるのか、という点の正確な見積りが妨げられてきたように思われる。よって本報告は、(a)と(b)とを一旦区別して再構成し、そのうえで上記の点に見積りを与える。

3 結果

カンギレムの所説は次のように再構成される。

(a) カンギレムは、十九世紀の生理学文献を主資料として、平均概念の導入が生理学にもたらした効果を歴史的に記述している。その効果とは、規範概念の平均概念への還元、言い換れば、正常／異常の判断を統計的分布のみに基づいて決定できるとする思考がもたらされたことである。

(b) 社会的な文脈での正常／異常にに関するカンギレムの中心的な論点は、諸個人の心身が一定の規範に合わせて均一化されるという意味での「規格化(normalisation)」である。規格化は、例えば労働者的心身が生産工程の単位と見なされるような事態として、主に産業化の要請に応えるものと捉えられている。「規格化」と平均概念の導入との関連については、カンギレムの見解は明確でない。

4 結論

カンギレムの所説のうち、「(a)規範概念の平均概念への還元」の射程は生理学の領域に限定されるものでなく、統計とはいかなる観察形式であるかを示した知見として一般化可能である。他方、「(b)規格化」からは諸個人の均一性という社会的な主題を汲み取れるが、これと(a)との関連は定かでない。

「規格化」を産業化の帰結としてのみ理解すると、これを平均概念の導入と関連づけることは難しくなるようと思われる。統計的な平均概念の使用はすでに十九世紀に普及しており、ティラー・システムやフォーディズムの導入よりもずっと早いからである。諸個人の均一性は産業化の帰結というより、統計的な観察形式がその性質上随伴させてしまう社会の描像として理解できるのではないか。

文献

Canguilhem, Georges, 1966, *Le normal et le pathologique*, Paris: Presses universitaires de France. (=1987, 滝沢武久訳『正常と病理』法政大学出版局.)